

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第21集

広島市安佐南区高取北三丁目所在

巢取遺跡 発掘調査報告

1997・3

財団法人 広島市歴史科学教育事業団



巢取遺跡全景（南から）



巢取遺跡 ST1（南から）

は し が き

広島市安佐南区内を旧沼田町から旧安古市町へ流れる太田川の支流安川流域は、旧山陽道が整備されるなど、古くから交通の要衝として発達してきた地域です。

近年来、安川周辺の地域は団地造成が盛んに行われており、まちの様子も大きく変わってきました。それにともなって、いくつかの埋蔵文化財が発見され、発掘調査が実施されて、少しずつ昔の様子も明らかになってきております。

このたび、宅地造成工事にともない発掘調査を実施した巣取遺跡においても、弥生時代の生活の痕跡と考えられる土坑や当時の人々が使用した土器、また近世の墓がみつかりました。このことにより、当地域における過去の人々の生活活動や、習俗を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。

本調査にあたり、御指導・御援助いただきました多くの方々、発掘調査に従事していただきました方々に厚くお礼申し上げます。この調査報告書が地域の歴史学習の一助となり、また郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立ではと願っている次第です。

1997年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は、広島市安佐南区高取北三丁目における高取造成工事に伴い、平成8年度に実施した巢取遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は梶川アサミから委託を受け、財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課が実施した。
3. 本書の執筆・編集は高下洋一が行った。
4. 遺構の実測、写真撮影は、高下、玉置和弘、日干甚文が実施した。また、遺物の実測及び遺構・遺物の製図、遺物の写真撮影は高下が実施した。
5. 本書に使用した遺構表示記号は次のとおりである。
S K：土坑・土壇墓 S T：石積基壇墓 S X：性格不明遺構
6. 第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（広島）を複製して使用した。
7. 第2図に使用した地図は、広島市発行の2,500分の1の広島市平面図（I -8・J -8）を複製して使用した。
8. 本書掲載の航空写真は、スタジオ・ユニに委託した。
9. 人骨については、山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に鑑定を依頼し、玉稿を得た。
10. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	遺構と遺物	7
IV	ま と め	15
	附 篇	17

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3	第8図	ST1 実測図（南から）	折込
第2図	遺跡周辺地形図	5	第9図	ST1 壺検出状況（東から）	11
第3図	遺構配置図	6	第10図	SK3 実測図	12
第4図	SK1 実測図	8	第11図	SK3 直上出土遺物実測図	12
第5図	SK1 直上出土土器実測図	8	第12図	SK4 実測図	13
第6図	SK2 実測図	9	第13図	SK4 出土遺物実測図	13
第7図	SK2 周辺出土土器実測図	9	第14図	SX1 実測図	14

図 版 目 次

巢取遺跡全景（南から）[巻頭図版]	Ⅱ－a	S T 1 検出状況（南から）
巢取遺跡 S T 1 （南から）[巻頭図版]	－b	S T 1 壺検出状況（東から）
巢取遺跡航空写真（北から調査前）[図版表紙]	－c	S T 1 墓標（東から）
	Ⅲ－a	S K 3 完掘後（北から）
I－a S K 1 完掘後（西から）	－b	S K 4 完掘後（東から）
－b S K 1 直上土器出土状況（北から）	－c	S X 1 完掘後（北から）
－c S K 2 完掘後（西から）	Ⅳ	出土遺物

I は じ め に

平成8年8月23日に広島市教育委員会（以下、市教委とする）は施行業者である有限会社いずみ建工（以下、いずみ建工）から、安佐南区高取北三丁目の高取北造成工事事業地内のうち、事業地内にある大元神社の移転地にあたる神社の北側に隣接する箇所において、埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会を受けた。これをうけて市教委では、分布調査を実施するとともに、この地は既に巢取遺跡として周知された遺跡（散布地）であることから、同年8月29日にいずみ建工あてに試掘調査の必要がある旨回答した。その後、市教委は同年9月4日・5日に試掘調査を実施し、弥生時代の土坑及び遺物が確認されたため、以後この遺跡の取り扱いについて、市教委といずみ建工は協議をかさねた。しかしながら、大元神社の移転が関係しており、地形的に計画変更が困難であることから、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。これを受けて、同年12月24日に高取北造成工事事業地内の土地所有者である梶川アザミから財団法人広島市歴史科学教育事業団に発掘調査の依頼があり、平成9年2月3日から2月28日まで調査を実施した。

調査実施の関係者は下記のとおりである。

調査委託者	梶川アザミ
調査受託者	財団法人広島市歴史科学教育事業団
調査担当課	財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課
調査関係者	中原照雄 常務理事
	佐川 清 文化財課長
	宮田浩二 文化財課事業係長
調査担当者	高下洋一 文化財課事業係学芸員
	玉置和弘 文化財課事業係学芸員

調査補助員（50音順）

天野千敏，大下一人，岡本真澄，日干甚文，辰岡高子

塚井数馬，森川ミヨ子，森野逸夫

整理作業員（50音順）

河合淳子，菅原彰子，住川香代子，橋本礼子

また、梶川アサミ氏、梶川勝義氏、有限会社いずみ建工升岡一憲氏、有限会社畠中設計事務所、広島市教育委員会文化課文化財係の方々をはじめ、スタジオ・ユニ井手三千男氏のほか多くの方々から調査を円滑に進めるために多大な御配慮、御援助をいただいた。また、山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏には人骨鑑定をしていただき、玉稿を得た。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ 位 置 と 環 境

巢取遺跡は、広島市安佐南区高取北三丁目に所在する。

安佐南区は、広島市の北西部に位置し、広島市街地とは隣接する。この巢取遺跡が所在する旧安古市町地域も、広島市街地の北方約8kmに位置し、比較的近郊であることから、合併以前から広島市のベッドタウンとして住宅団地造成が行われてきている。

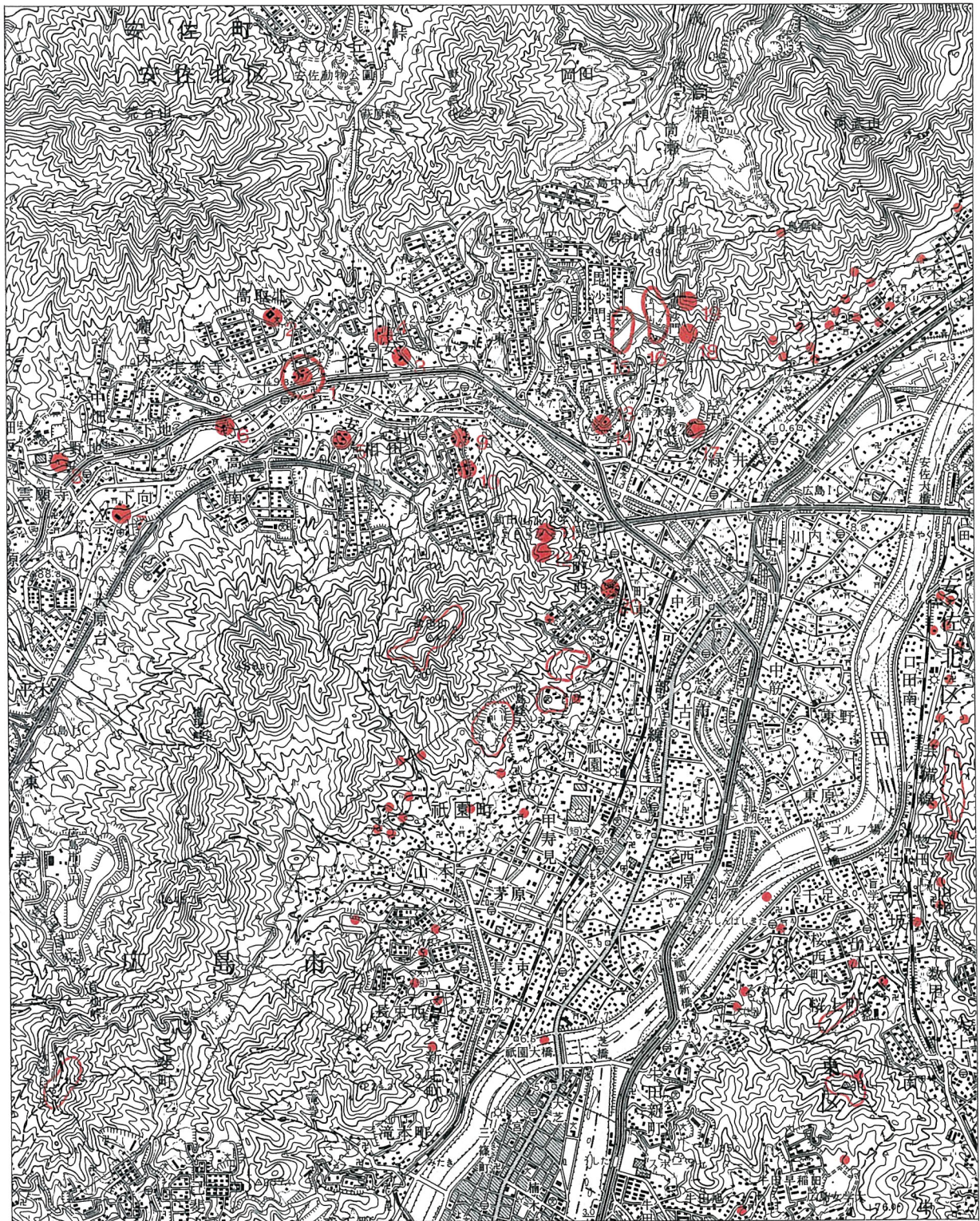
太田川の支流である安川は、旧沼田町伴奥畑を水源として旧町内のほぼ中央を南東方向に貫流する。この安川流域は西方から東方へ向けて開口する狭い谷地形を形成しており、その合流地域は比較的広い沖積地を形成している。旧集落は、この安川流域沿い及び太田川や古川の合流地域における沖積低地を中心に点在している。なお、この安川流域沿い及びこの合流地域は、古くは旧山陽道が、また現在では山陽自動車道及び広島インターチェンジが整備されており、古今を問わず交通の要衝にもなっている。なお、この安川流域沿いには河岸段丘状の沖積地と、やや広い扇状地状の沖積地がひろがる。

ところで、これらの団地造成がおこなわれているのは、安川流域に向けて突き出した、北西部は荒谷山（63 L 3 m）、野登呂山（453 m）、南西部には武田山（410.9 m）、火山（485.7 m）から派生している多くの低丘陵ないし山麓緩斜面である。埋蔵文化財の多くは、これらの低丘陵上を中心に点在していたと推定されるが、町の様子も大きく変わるほど、ほとんど宅地として造成されており、現在では地形を復元することも困難となっている。その中には、確認することなく消滅してしまった埋蔵文化財も少なからず存在すると考えられる。

本遺跡は、荒谷山から南に派生する、標高約68 m付近の低丘陵上に位置する。周囲の生活地との比高は約20 mである。本遺跡の立地する低丘陵は、南側は大元神社の造営、また北側は高取第一団地造成によって削平されており、一見独立丘陵を呈している。しかしながら、周辺の地形から復元した場合、中畦遺跡¹⁾の存在した標高164 m前後の広島市立高取北中学校が位置する場所とは、恐らく同一丘陵と考えられ、このあたりから丘陵の傾斜が僅かに蛇行しながら本遺跡の所在する地点にかけて緩やかに下るものと考えられる。そして、西側は安川に注ぎ込む小河川の流れる狭隘な谷地形となり、また東側はやや緩やかに下る扇状地状の地形が広がる。

さて、安川流域、特に本遺跡周辺の旧安古市町地域において確認されている遺跡はそれほど多くない。その多くは下流域に見られるものである。以下、時代ごとにその概要を述べていきたい。現在までのところ、弥生時代後期以前の時代のものは確認されていない。

弥生時代 弥生時代後期の遺跡としては、本遺跡のほか、前出の中畦遺跡、毘沙門台遺跡²⁾、毘沙門台東遺跡³⁾、恵木遺跡⁴⁾、などがあげられる。同一丘陵尾根上に立地する中畦遺跡は緩斜面上に位置し、竪穴式住居跡2軒、土坑10基が確認され、このうち第1号住居跡からはガラス勾玉が出土している。恵木遺跡は安川を挟んだ武田山から北方向に派生した丘陵裾部の独立丘陵上に位置し、竪穴式住居跡2軒、土坑12基、箱式石棺4基が確認されている。また毘沙門台遺跡、毘沙門台東遺跡は、それぞれ標高397 mの権現山から東にのびる、隣接した丘陵上に位置する。前者からは70軒の住居跡、180基の土坑が、後者からは47軒の住居跡、111基の土坑が確認されている。それぞれ後期から古墳時代初頭にかけて営まれたと考えられ、太田川下流域において「せいぜい三～四戸一



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

1. 巢取遺跡 2. 中畦遺跡 3. 鶏頭原遺跡 4. 鶏頭原古墳 5. 恵木遺跡 6. 長楽寺古墓
7. 国重城遺跡 8. 雲願寺古墓 9. 胡子神社遺跡 10. 相田遺跡 11. 津谷古墳 12. 津谷遺跡
13. 白山古墳群 14. 白山城跡 15. 毘沙門台遺跡 16. 毘沙門台東遺跡 17. 神宮山古墳群
18. 権現山古墳群 19. 権現山城跡 20. 片山遺跡

単位とする」⁵⁾ 比較的小規模な集落が多いなかであって、拠点的な大規模な集落と見微すことができない。

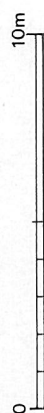
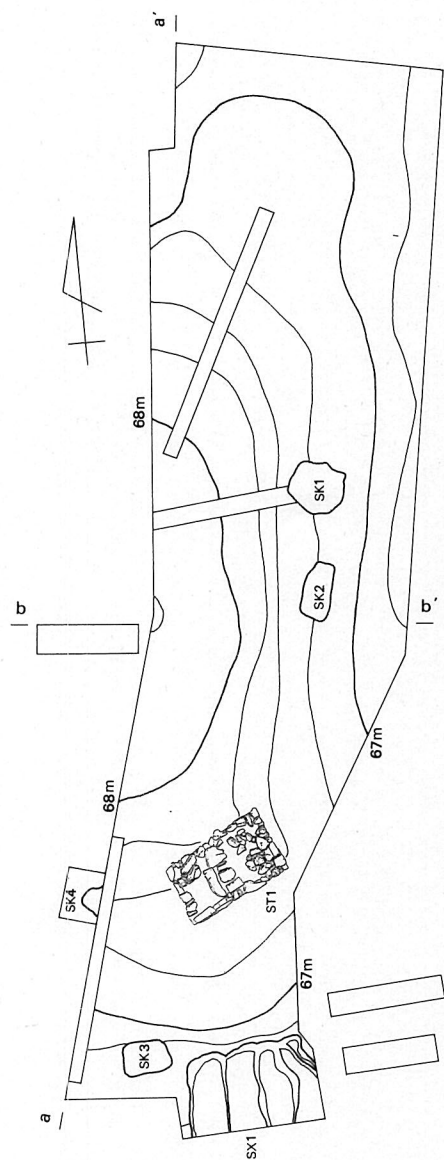
古墳時代 古墳時代の遺跡として、白山第1, 2号古墳⁶⁾、鶏頭原古墳などがあげられる。白山第1, 2号古墳は、共に埋葬主体は箱式石棺であり、6世紀前半に比定されている。このうち白山第1古墳からは短甲片、鉄刀、鉄鉢、鉄斧などが出土している。国重城遺跡内からは古墳時代初頭とされる隅丸方形住居跡2軒が確認されている⁷⁾。

古 代 古代以降は、この安川沿いに官道である山陽道が整備されている。西に隣接する沼田町伴に「伴部駅」が設置されていたとされている。また、太田川との合流点付近には、条里遺構が遺存しているともいわれているが、これに関連する遺跡として確認されたものは現在のところない。またその他の遺跡として、緑井植林遺跡からは白鳳期の素弁蓮華文軒丸瓦が採集されており、寺院が存在していた可能性がある⁸⁾。

中・近世 山城跡としては、県史跡銀山城跡をはじめとして白山城跡⁹⁾、尾越城跡、国重城跡¹⁰⁾、伴城跡などがある。銀山城跡は安芸国守護として補任された武田氏が鎌倉時代末期の信宗の代において築城したとされる。以後室町時代を通じて、天文10年(1541)に武田氏が滅亡するまで、武田氏の拠点であった。比高約400mの標高411mの武田山山頂を中心に、各支丘陵尾根にそって40以上の郭が設けられている。総面積は650m×450mである。銀山城の北西側には武田氏の一族である伴氏の伴城、国重氏の国重城が位置する。また安川を挟んだ北方約3kmに位置する白山城は、調査者は銀山城の出城ではないかとしている。その他の中世の遺跡としては長楽寺遺跡があり、ここからは古墓が確認されている。

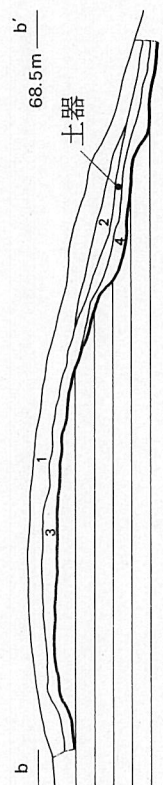
注

1. 広島市教育委員会 1984『中畦遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第29集)
2. 毘沙門台遺跡発掘調査団 1982『毘沙門台遺跡現地説明会資料』
3. 広島市教育委員会 1984『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第48集)
4. 恵木遺跡発掘調査団 1982『恵木遺跡発掘調査報告』
5. 河瀬正利 1979「歴史のあけぼの」『高陽町史』
6. 広島県教育委員会 1973『白山城跡発掘調査概報』
7. 広島市教育委員会 1982『国重城跡発掘調査報告』(広島市の文化財第19集)
8. 『中国新聞』1994. 4. 23朝刊
9. 注6に同じ
10. 注7に同じ



土層説明

1. 表土 (暗黄色砂質土)
2. 暗黄褐色砂質土 (炭化物を含む)
3. 暗黄色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土



第3図 遺構配置図 (S=1:200) 土層断面図は S=1:100

Ⅲ 遺 構 と 遺 物

概 要

本遺跡は、標高 631.3 m の荒谷山から南に派生する、標高約 68 m 付近の低丘陵上に位置する。周囲の生活地との比高は約 20 m である。本遺跡の立地する低丘陵は、南側は大元神社の造営、また北側は高取第一団地造成によって削平されており、一見独立丘陵を呈している。しかしながら、団地造成以前の地形図を見るまでもなく、周辺の地形等を観察すれば、広島市立高取北中学校建設工事にともなって発掘調査された中畦遺跡が存在する、標高 164 m 前後のあたりとは、同一丘陵と捉えることができ、当時は、このあたりからやや緩やかに蛇行しながら下降する丘陵尾根の先端部とみなすことができる。そのことから現在宅地が存在する箇所にもなんらかの遺構が存在した可能性がある。

発掘調査は、任意に調査区を十字に区画し、まずトレンチを掘削し遺構面の確認を行ったのち、全面的に掘り下げを行った。

確認できた遺構と遺物は、弥生時代の土坑 2 基と土器、江戸時代の土壇墓 2 基・石積基壇墓 1 基と陶器・瓦・鉄製品（釘）および時期・性格不明遺構 1 基である。

遺構・遺物

1 S K 1

調査区のほぼ中央部において確認した。調査区の最高所（標高 68.25 m）からやや東に下った箇所、標高約 67.3 m に位置する。本遺構の平面形態は楕円形を呈し、規模は長辺 72.5 cm × 短辺 70 cm である。床面の規模は長辺 85 cm × 短辺 82 cm となり、深さは約 49 cm である。床面の標高は、66.85 m 前後となりほぼ平坦である。断面形態はいわゆるフラスコ状を呈する。このことから貯蔵穴と考えられる。

遺物は、土坑内埋土中からは、出土していない。

なお、広島市教育委員会から試掘調査において土坑内埋土中から土器が出土した旨聞いていた。しかし、発掘調査における土器の出土状況は土砂が土坑内にほぼ埋りきったのち、その直上に堆積した土層中に包含されたものと確認された。試掘調査で出土した土器と本調査で出土した土器は接合することから、試掘調査の土器もこの堆積層と同一層から出土したとする方が適切と考えられる。つまり、確実に本遺構に伴う遺物はないけれども、直上から土器が出土したと捉えられる。このことから、本遺構の時期はこれらの土器の時期よりも若干遡ると考えられよう。

遺 物

弥生土器(1)甕形土器である。口縁部は「ハ」字状にひらき、端部はやや凹むが平坦な面を呈する。胴部最大径付近のカーヴがゆるやかな倒卵形を呈する。底部はしっかりと面をもつ。頸部下には櫛歯状工具による刺突文が巡っている。調整は、外面は口縁部はなで、体部はハケメののち一部なで消している。内面は口縁部はなで、体部はヘラケズリを施している。口径 22.2 cm、器高 22.5 cm、底部径 8.7 cm、胴部最大径 22.2 cm である。色調は外面暗赤褐色、内面暗黄褐色、胎土は

2～3mmの長石等の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

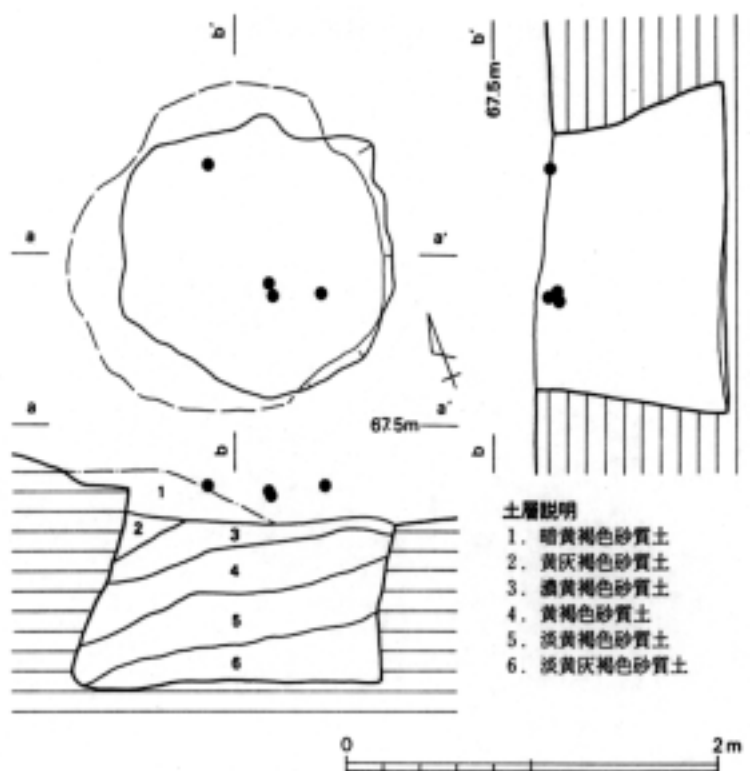
弥生土器（2）甕形土器の口縁部の破片である。口縁部は「く」字状にひらき、端部はややくぼむが平坦な面を呈する。頸部下にはヘラ状工具による刺突文が巡っている。調整は、外面はなで、内面は口縁部はなで、体部はヘラケズリを施している。色調は、外面赤褐色、内面暗黄褐色、胎土は2～3mmの長石等の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

弥生土器（3）底部の破片で、わずかにくぼむ。調整は外面は体部はハケメののちなで、内面は横方向のヘラケズリである。色調は明茶褐色、胎土は微砂粒を多く含み焼成は良好である。

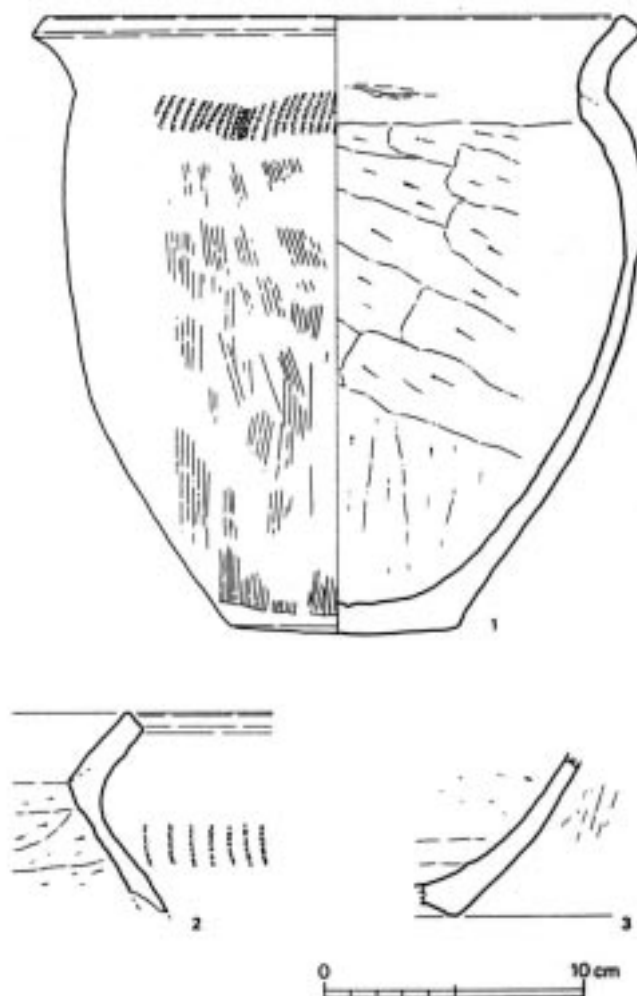
2 SK 2

調査区のはほぼ中央部において確認した。調査区の最高所（標高 68.25 m）からやや東に下った箇所、標高約 67.25 m に位置する。SK 1 の約 1.3 m 南に位置する。本遺構の平面形態は長方形を呈し、上辺の規模は長辺 149 cm × 短辺 79 cm である。床面の規模は、長辺 129 cm × 短辺 50 cm である。深さは、北側小口で 50 cm、南側小口で 40 cm である。床面の標高は南側小口で 66.37 m、北側小口で 66.72 m であり、ほぼ平坦である。

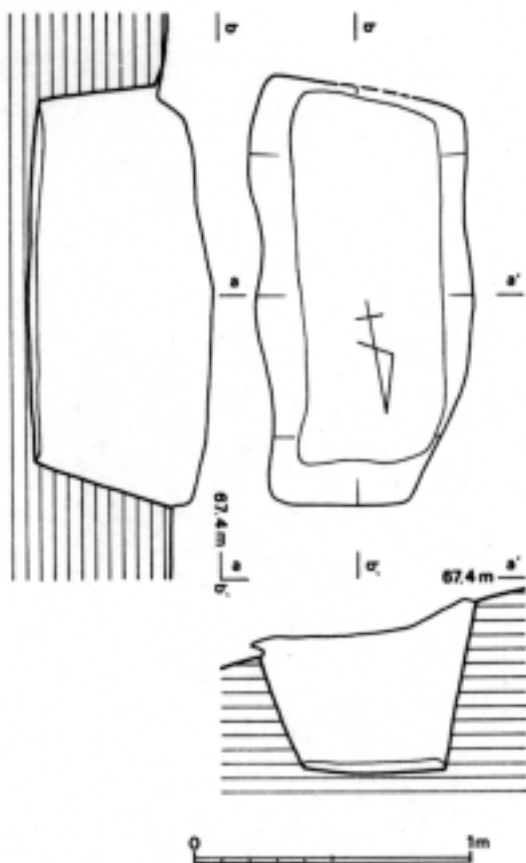
遺物は、本遺構内からは出土していない。しかしながら、本遺構の直上及びそのやや西側の地山直上から弥生土器が出土している。完形品はないが、少なくとも3個体分を確認しえた。これらの土器の特徴は後期後半のものであることから、本遺構は、これよりも若



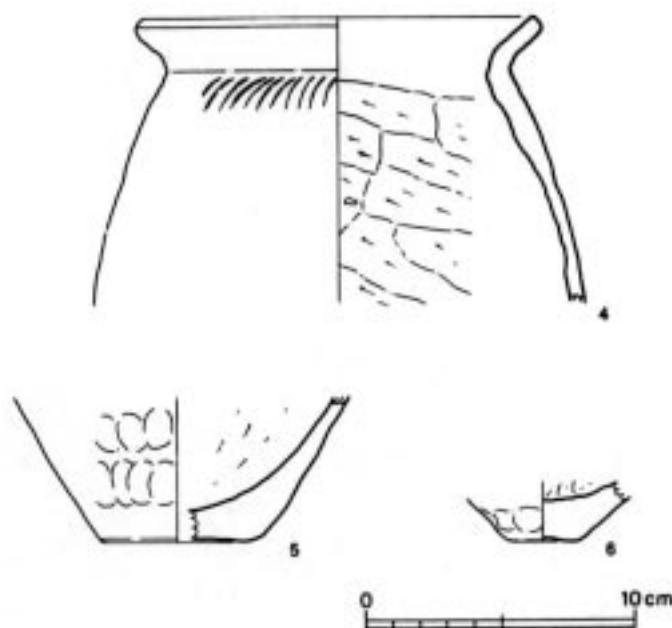
第4図 SK 1 実測図（S = 1 : 40）●遺物出土位置



第5図 SK 1 直上出土土器実測図（S = 1 : 3）



第 6 図 SK 2 実測図 (S = 1 : 3)



第 7 図 SK 2 周辺出土土器実測図 (S = 1 : 3)

干漚る時期のものと考えられる。本遺構の性格については、墓墳であるか、あるいはその外の性格の遺構であるかについては、遺物が出土しておらず、また土層などからも明確にしえず、不明と言わざるを得ない。

遺 物

弥生土器 (4) 甕形土器である。口縁部は「ハ」字状にひらき、端部は平坦な面を呈する。ゆるやかなカーブを描く体部を呈する。頸部下にはヘラ状工具による刺突文が巡っている。調整は、外面はなで、内面は口縁部はなで、体部は横方向のヘラケズリを施している。口径 22.2 cm, 器高 22.5 cm, 底部径 8.7 cm, 胴部最大径 22.2 cm である。色調は外面暗赤褐色, 内面暗黄褐色, 胎土は 2 ~ 3 mm の長石等の砂粒を多く含み, 焼成は良好である。

弥生土器 (5) 底部の破片で, わずかにくぼむ。底径は 5.3 cm である。調整は外面はなで, 内面は縦方向のヘラケズリである。色調は外面は暗褐色, 内面は暗黄褐色, 胎土は 2 ~ 3 mm 大の砂粒を多く含み, 焼成は良好である。

弥生土器 (6) 底部の破片で, わずかにくぼむ。底径は 2.3 cm である。調整は外面はなで, 内面は縦方向のヘラケズリである。色調は明茶褐色, 胎土は微砂粒を多く含み, 焼成は良好である。

3 ST 1

調査区の中央よりもやや南側において確認した。調査区の最高所 (標高 68.25 m) からやや南に下った箇所, 標高 67.75 ~ 67.5 m に位置する。石組基壇の近世墓である。

この石組基壇は、平面形は長方形を呈する。規模は長辺が約3 m、短辺が約1.7 mである。高さ0.5～0.6 mである。東西両短辺の石材の積み方はほぼ揃っているものの、長辺は南面と北面においては様相が異なる。すなわち、南面は長さ0.7～1 mの平石を直立させるなど、2段に長手積にする。一部くさびを打ち込んだ痕跡がみられる石材もある。なお、この南面は中央2段目において約0.5 m程度の空間が存在し、0.3 m程度内側に引っ込む。その引っ込んだ位置には、長さ40 cm、幅20 cmの、くさびを打ち込んだ痕跡のある長方形の石材が設置され、段をなす形態を呈する。一方、北面は0.3～0.5 m大の河原石を2段ないしは3段に、小口積状に積み上げている。このように、積み方や、南面における段を意味あるものと捉えるならば、南面が前面とすることが適切であろう。

基壇上面の中心部に骨蔵器（甕）が見られた。この骨蔵器を埋置したのち棧瓦を蓋として被せたのち、さらに平石で封鎖している。さらにこの瓦を被せる際に安定を保つためか、骨蔵器の上面との高さを揃えて、上面をほぼ平坦にした板石をこの甕の北側に直立させて設置している。また、その北側には石積に接する位置に骨蔵器北側の直立する板石と一辺が平行するように、また上面を水平にさせて置いた、平面形が台形を呈する平石が存在する。そして、これらの甕や平石の西側には東面に墓碑銘をむけて、断面四角形を呈する直方体の墓標が倒れていた。この墓標の大きさは、長さ0.85 m、幅0.3 m、厚さ0.3 mである。墓標は、一辺に「嘉永四年 亥七月廿九日 直蔵」が刻まれている。この墓標は上記の平面形が台形を呈する平石の上が、あるいはこの平石を含めてコ字状に石が配置してあり、この内側の空間に存在したのであろう。後者の場合、そのまま倒れたのであれば、墓碑銘は下方になるのが自然であろうが、東面に向いていることは少し疑問が残る。ただ前者の場合でも、墓標の底面は平らに削られているものの、平石にそのまま直立させることは不安定と考えられ、簡単には首肯できない。なお、骨蔵器内には成人と幼児の二人分の火葬人骨片とともに炭化物が多数みられた。成人骨のなかに人為的に切断されたような断端をもつ骨片が存在した。

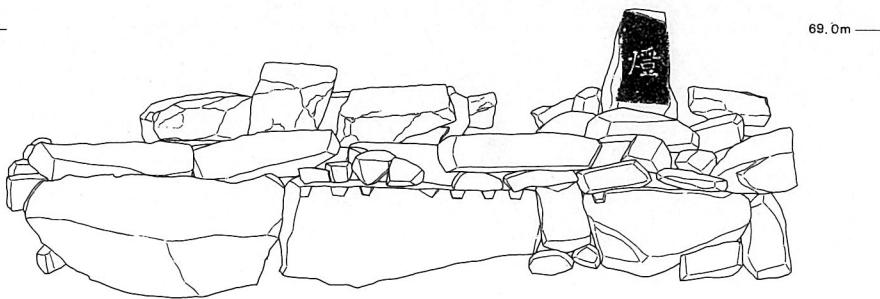
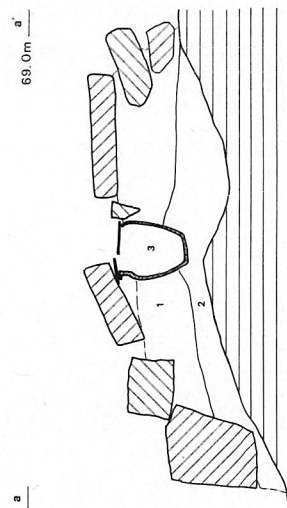
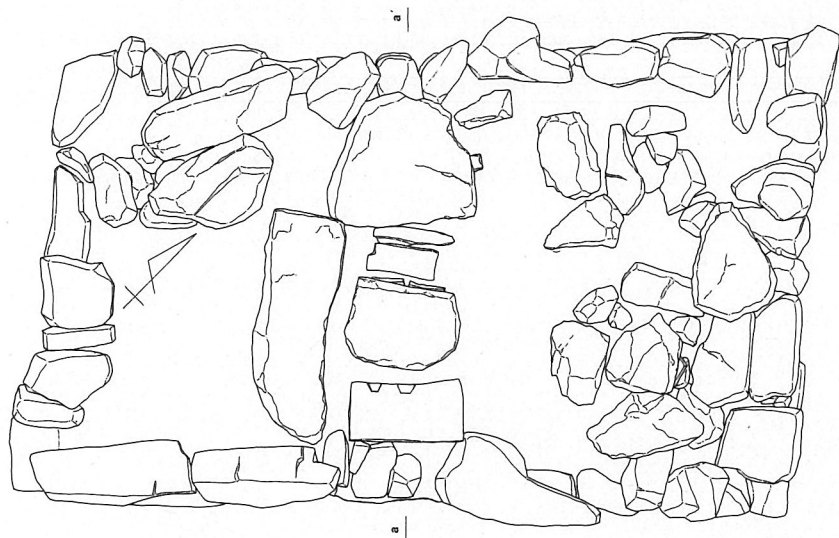
また、この基壇上面、東南の位置には、基礎に4～5個の礫を円形に巡らし、その中央には南面に「燈」字を刻んだ断面四角形の台形状の直方体の石が直立していた。またその北側には礫を5～6石置かれていたが、それぞれの下方には遺構も存在していない。

なお、S T 1 周辺からは供献としての遺物はみられなかった。

遺 物

陶器（7）甕で、骨蔵器として利用されたものである。器高27.1 cm、口縁径20.5 cm、底部径15 cm、胴部最大径27.5 cmである。底部からゆっくり立ち上がり丸みをもって外傾し、頸部で締まる。口縁部はやや直立し、端部は内外面に拡張し、「T」字状をし、やや内傾する面をつくる。口縁端部には2条の凹線が巡る。また体部内面下半部には叩きの痕跡がのこる。

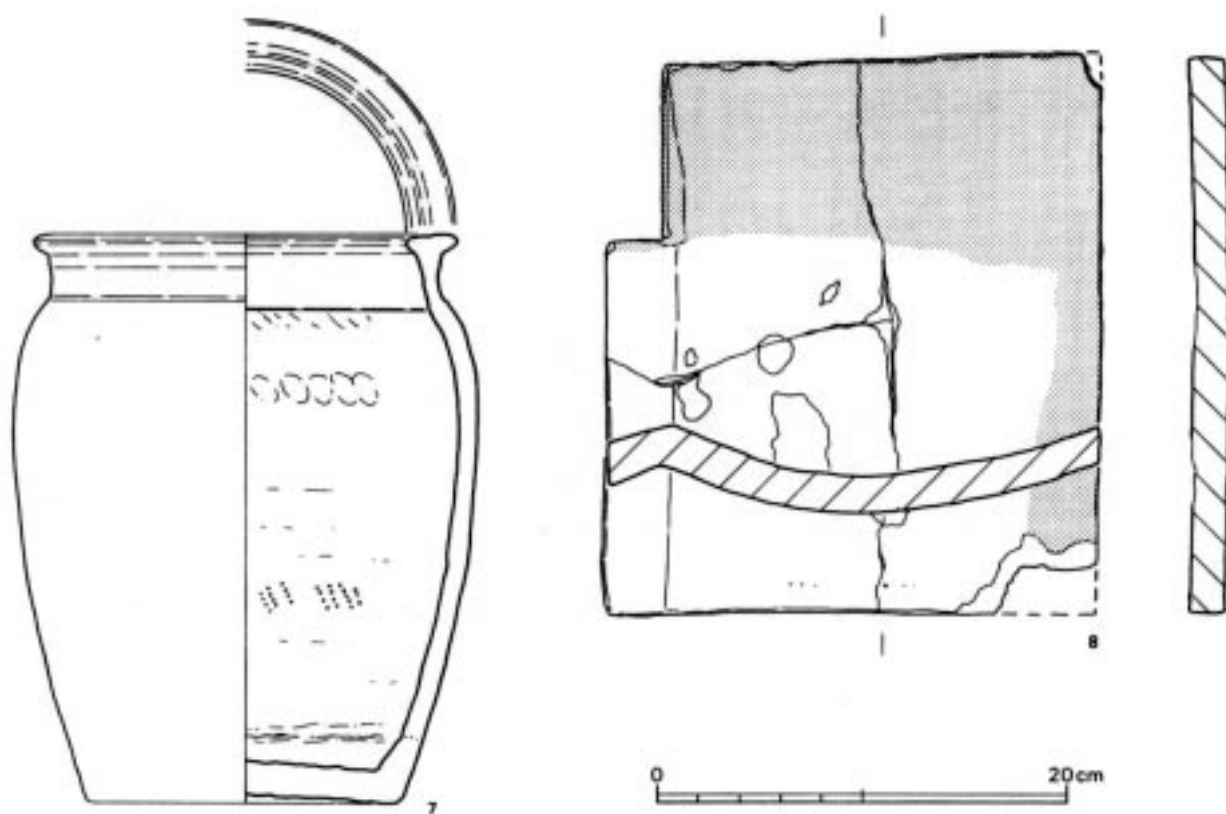
瓦（8）いわゆる棧瓦（平瓦）で、煉瓦である。上記甕の蓋として転用されている。封鎖した平石の重みでか割れて見つかっている。平部における切込が存在するのか、破損しており不明である。棧部切込の長さは8.5 cmである。凹面の棧部弧深は1.3 cm、凸面の平部弧深は2.4 cmである。全長は26.3 cm、全幅は24 cm（棧部3.4 cm、平部20.6 cm）、厚さは1.8 cmである。凹面の下半部は風化している。調整は全面ヘラなどでしている。風化箇所以外には一部銀化現象がみられる。色調は黒灰色を呈し、胎土・焼成とも精緻・良好である。



- 土層説明
 1. 暗黄褐色砂質土
 2. 黄灰褐色砂質土
 3. 黄褐色砂質土 (骨片, 炭化物まじり)



第8図 ST1実測図 (S=1:20)



第9図 ST1出土遺物実測図（S=1:4）※スクリーントーンは風化箇所

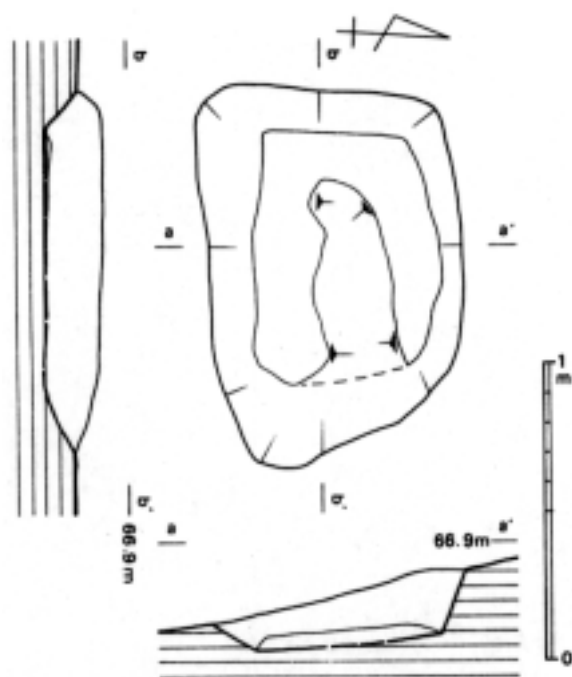
4 SK3

調査区の南端付近において確認した。調査区の最高所（標高68.25 m）から南に下った箇所、標高66.75 mに位置する。本遺構の平面形態は長方形を呈し、上辺の規模は長辺120 cm×短辺90 cmを呈する。遺構の埋土は、黄褐色砂質土である。床面は多少攪乱を受けているが、規模は長辺120 cm×短辺67 cmである。また床面の標高は西側小口で66.62 m、東側小口で66.6 mで、ほぼ平坦である。深さは両小口側とも10 cmであり、高い位置から掘り込まれたものと考えられるが、上方からは掘り方など確認できなかった。

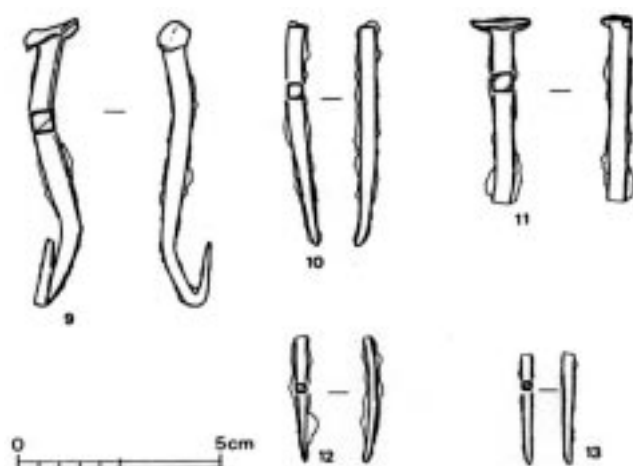
遺物は本遺構内からは出土していない。しかしながら、調査中、本遺構の直上から火葬人骨片、釘及び瓦片が出土している。上記のように遺構の深さが比較的浅いことから、この土壌に伴う可能性が高い。

遺物

鉄製品（9～13）すべて断面形態が方形を呈する角釘である。9は上半部および下半部の2箇所て若干屈曲し、先端部は強く折るかえり、鉤形を呈する。現存長は7.5 cm、復元すると9.3 cm程度になる。幅は0.5 cm×0.5 cmである。頭部はやや両側に垂れるようになっており、長さは1.5 cm、幅は0.8 cmである。重さは17.1 gである。10は、上部が一部欠損している。先端は屈折して乱現存長は5.8 cm、幅は0.4 cm×0.4 cmである。重さは4.3 gである。11は、下半部が欠損している。現存長は4.8 cm、幅は0.5 cm×0.45 cmである。重さは6.9 gである。12.13は、下半部の破片で、13はやや曲がっている。12は現存長3.4 cm、幅は0.3 cm×0.2 cmである。重さは0.8 gである。13



第10図 SK3実測図 (S = 1 : 30)



第11図 SK3直上出土遺物実測図 (S = 1 : 2)

は現存長 3.0 cm，幅は 0.2 cm × 0.2 cm である。重さは 0.8 g である。

5 SK4

調査区の南側，西端部において確認した。調査区の最高所（標高 68.25 m）から南に下る中途の箇所，標高 67.5 m に位置する。広島市教育委員会の試掘調査において，遺構の存在が確認されていたが，トレンチで半截されており，結果的に西半分のみを確認した。平面形態はほぼ円形を呈するものと考えられ，復元規模は，80 cm × 78 cm である。床面は 60 cm × 30 cm であるが，南北方向の断面形態はややすり鉢状を呈する。深さは約 30 cm であり，標高は 67.49 m である。本遺構の埋土は黒色炭化物土層で，上方に黒褐色砂質土が薄く堆積する。

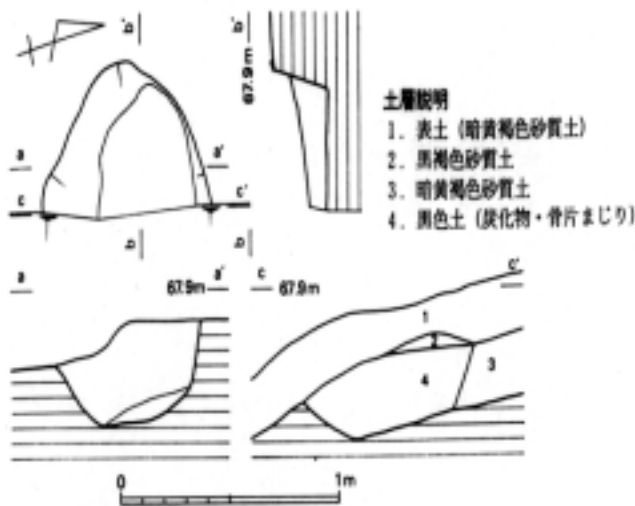
この黒色炭化物土層中には，炭化物に混ざって火葬人骨片多数と釘 1 点が出土している。恐らく火葬墓と考えられる。人骨片の中に第二頸椎の歯突起（のどぼとけ）が残存している。

遺物

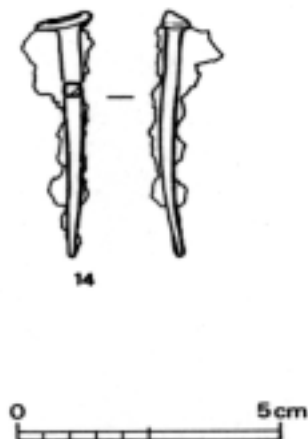
鉄製品 (14) 断面形態が方形を呈する角釘で，完形品である。下半部がやや屈曲している。長さは 5.5 cm，幅は 0.3 cm × 0.3 cm である。頭部の長さは 1.5 cm，幅は 0.7 cm である。片側は内側に折り返している。重さは 4.2 g である。木質等は付着していない。

6 SX1

調査区の南端において確認した。調査区の最高所（標高 68.25 m）から南に下った箇所，標高 66.5 m に位置する。一部未調査部分があり，また南側は神社造営の際削平されており，遺構全形を確認することはできなかった。規模は現状で長さ 3.5 m，幅 2.4 m である。平面形態から，本遺構は少なくとも 5 つの掘り込みが重複した結果と推定された。ここでは 5 つの掘り込みを便宜的に西から a・b・c・d・e とする。しかし，埋土はほぼ同一の土砂が堆積しており，その前後関係については



第 12 図 S K 4 実測図 (S =1 : 30)



第 13 図 S K 4 出土遺物実測図 (S =1:2)

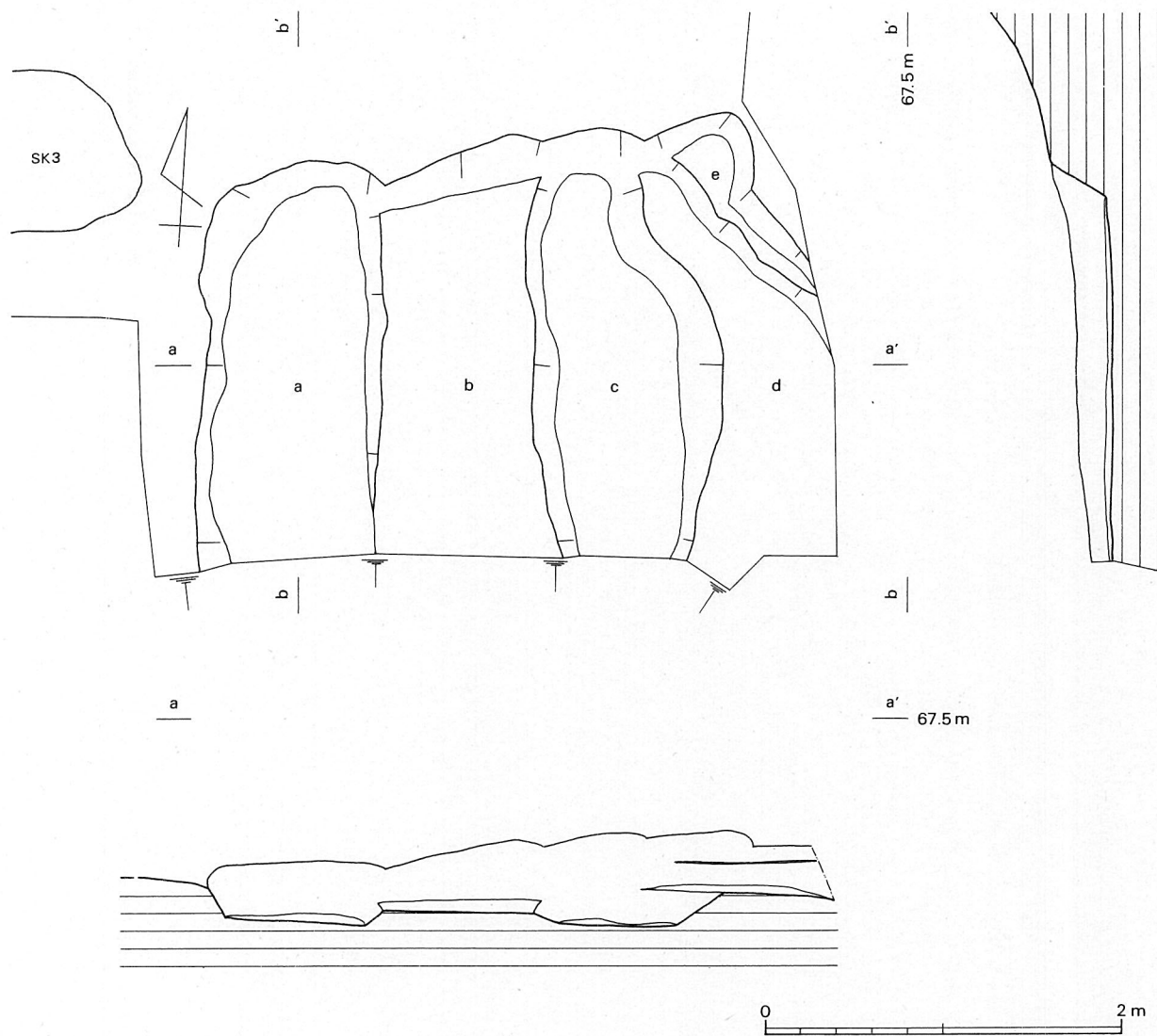
把握できなかった。ただ、a・b・cのうち、bはあたかも一段低いa・cに切られているように観察され、またa・cは形態がほぼ同一を呈していると捉えることができることから、あくまでも推測の域を越えないが、bが先行して掘り込まれ、そののち、近接する時期にa・cが掘り込まれたと考えられる。

aは現状の規模が長辺224cm×短辺98cmである。深さは最大で30cm、最低で8cmである。床面はそれぞれの端部にいくほど若干高くなっているが、ほぼ平坦である。規模は208cm×80cmである。cは現状の規模が長辺240cm×短辺106cmである。深さは最大で50cm、最低で8cmである。床面はそれぞれの端部にいくほど若干高くなっているが、ほぼ平坦である。規模は216cm×68cmである。

また、このふたつの掘り込みに挟まれるように、両者よりも床面が8cm高い位置に存在するbがある。a・cに切られていると考えられる。この面の現状規模は約200cm×86cmである。

そのほか、cの東側には床面よりも20cm高い平坦面が隣接する(d)。このdの床面は現状で230cm×60cmのやや三角形の平坦面を呈する。さらにこの東側にはdの床面よりも14cm高い平坦面が位置する(e)。このeの床面の平面形は不整形で、アルファベットの「P」字状を呈する。

本遺構内からは遺物は出土していない。また本遺構の性格についても不明である。



第14図 SX 1 実測図 (S=1:40)

Ⅳ ま と め

本発掘調査において、弥生時代の土坑2基、江戸時代の土壙墓2基と嘉永四年銘の石積基壇墓1基及び時期・性格とも不明の遺構1基を確認した。

弥生時代に属する土坑2基のうち、S K 1はその形態から貯蔵穴と考えられる。またS K 2については、墓壙か貯蔵穴かについては確認できなかった。それぞれ埋土中からは遺物が出土しておらず、時期については不明である。しかし、直上に堆積した土砂中からは土器が出土しており、これらの土器の特徴は、妹尾周三氏による安芸地域における土器編年によれば、安芸V-4様式に比定できる¹⁾。すなわち後期後半ごろの所産と考えられる。このことから、これらの土坑は、いずれも弥生時代後期後半よりも遡る時期と考えられる。

江戸時代に属する土壙墓2基のうち、S K 3は埋土から遺物の出土はない。その直上から成人の火葬人骨・釘などが出土している。本遺構に伴うと考えられ、その場合火葬墓であろう。一方、S K 4は円形の土坑で、埋土は黒色の炭化物層である。遺構内からは炭化物に混じって成人男性の火葬人骨と釘が出土している。土坑床面はやや焼けた痕跡もあり、火葬墓である。

嘉永四年銘のS T 1は、長さ3 m×幅1.7 m、高さ0.6 mの石積基壇墓である。成人・幼児の二人分の火葬骨を入れた骨蔵器をその中央に埋置している。倒れて見つかった墓標には、「嘉永四年 亥七月廿九日 直蔵」と刻まれている。また、骨蔵器の東側には、一片に「燈」と刻まれた直方体の切り石が直立していた。

ところで、県内で調査された近世墓のうち、墳丘・積石など外標施設の有無などはあるが、埋葬施設としては土壙墓が多い²⁾。S T 1のように基壇内に骨蔵器を埋置し、墓標を有する事例は類例が少ない。限りなく今日的な墓葬のあり方を示しているとも捉えられる。ところで、このような埋葬形式は追跡していないので、いつごろからこのような埋葬形式が行われるようになったのか不明である。しかし一方で、S K 3・S K 4や嘉永二年銘・安政三年銘の墓石が出土した豊田郡本郷町陣べら遺跡(7基の集団墓地)³⁾のような土壙墓の事例もある。このことから、この埋葬形式の違いは、時間的な差異というよりも被葬者の性格の違いか、もしくは地域差を示すものであろう。少なくとも本遺跡例では共存関係にあることから、前者の可能性が高い。S T 1の被葬者がいかなる性格の人物なのか不明であるが、いずれにしても近世末における埋葬形式として貴重な資料を提供したといえよう。

注

1. 妹尾周三 1992「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
2. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1984 『糸井古墓群発掘調査報告』など
3. 陣べら遺跡群発掘調査団 1971『陣べら遺跡群発掘調査概報』

広島市巢取遺跡出土の近世火葬骨

松 下 孝 幸*

【キーワード】：広島県，近世人骨，火葬骨，第二頸椎

はじめに

広島県広島市安佐南区高取北三丁目に所在する^{すどり}巢取遺跡の発掘調査が、宅地造成に伴う代替地造成工事に伴い、1997年2月に行なわれた。調査の結果、3ヶ所から火葬骨が検出された。

広島県での近世の火葬骨の例は大明地遺跡（広島市）があり、4体分の火葬骨が検出されている。

3ヶ所から出土した火葬骨の残存量はそれほど多くないが、なかには性を判別できたものもあったので、残存部位や性別，年齢などを報告しておきたい。

資 料

今回、本遺跡の3ヶ所から火葬骨が検出された。人骨の出土状況から、ひょっとしたらこれらの火葬骨は1ヶ所で火葬され、そのうちの一部が他所に埋葬されたのではないか、という疑問が考古学の立場から提起された。まずこの問題について検討してみた。残存量はS K-3が一番少なく、S T-1，S K-4の順に多い。残存していたのは3ヶ所とも大部分は頭蓋と四肢骨の破片である。これらを解剖学的に精査したところ、3ヶ所の火葬骨については重複部分はないが、色調がそれぞれ違い、骨質が異なり、お互いに接合する骨がまったくないことから、それぞれの場所から出土した火葬骨はそれぞれ別個体と推測した。ただ、S T-1出土人骨のなかには幼児骨（4歳前後の右側大腿骨と頭蓋片）が含まれていた。従って、今回出土した火葬骨は合計4体である。その他の3体の火葬骨はいずれも成人骨と思われる。

表1 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	備 考
S K-3	不明	壮年	火葬骨 約 90 g
S K-4	男性	壮年	火葬骨 約 340 g
S T-1-1	不明	不明	火葬骨 約 115 g
S T-1-2	—	幼児（4歳前後）	火葬骨 約 5 g

これらの火葬骨の所属時代は、S T-1の墓標に「嘉永四年 亥七月廿九日」と刻まれていたことなどから、近世と推定されている。

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢に関して

*Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

は表2の基準のとおりである。

表2 年齢区分

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

所 見

S X－3（性別不明，壮年）

残存量は約90 gである。残存していたのは頭蓋片と四肢骨片である。頭蓋は左側頭頂骨と右側岩様部などが残存していた。冠状縫合の右側部が観察できたが、おそらくこの部分は内外両板とも開離していたようである。四肢骨は上腕骨と思われる骨片などである。

性別は推測できない。年齢は冠状縫合の右側部が内外両板とも開離していたようなので、壮年としておきたい。

S K－4（男性，壮年）

もっとも残存量が多く、重量にして約340 gあった。頭蓋は少なく、後頭骨ばかりのようである。上項線の観察ができたが、かなり明瞭である。ラムダ縫合の観察ができたが、内外両板とも開離していたものと思われる。

四肢骨のなかには右側的大腿骨、右側の上腕骨、肩甲骨を同定することができた。上腕骨は三角筋粗面部が残っており、この発達は良好である。

その他に頸椎体と胸椎体が残存していた。また、第二頸椎（軸椎）の歯突起（俗にいう「のどぼとけ」）が残存していたことは特筆しておきたい。

性別は、上項線がかなり明瞭であること、三角筋粗面の発達が良好であることから、男性とした。年齢はラムダ縫合が内外両板とも開離していたようなので、壮年としておきたい。

S T－1

残存量は約120 gである。唯一墓碑が残り、時代を特定することができた墓である。その墓碑には「嘉永四年 亥七月廿九日 直蔵」の銘が刻まれていた。嘉永4年とは1851年にあたる。

前述しているように子供の骨が含まれていたので、人骨番号は「S T－1－1」と「S T－1－2」に分けることにした。

S T - 1 - 1 (性別・年齢不明)

残存していたのはほとんどが頭蓋で、重量にして約115 gである。右側頬骨と後頭骨などが残存していた。四肢骨は骨片ばかりである。そのなかに人為的に切断されたような断端をもつ骨休が1片存在する。骨体の大きさからすれば上腕骨だろうか。性別・年齢を推測することができるような部分が存在しないが、成人骨である。

S T - 1 - 2 (幼児)

残存量は約5 gである。成人骨に混ざって、子供の頭蓋片と思われる薄い骨と右側大腿骨とが残存していた。右側大腿骨の大きさからおそらく4歳前後の幼児と推測される。

要 約

広島県広島市安佐南区高取北三丁目にある巢取遺跡から火葬骨が検出された。残存量は多くはないが、性別・年齢を推測できたものもあった。その結果は次のとおりである。

1. 火葬骨は3ヶ所から検出されたが、人骨を解剖学的に精査した結果、それぞれ別個体で、これらは4体分の火葬骨であった。
2. 3体は成人骨、残りの1体は4歳前後の幼児骨である。
3. いずれも残存量は少ない。
4. 第二頸椎（軸椎）の歯突起が残存していたものがあった（S K - 4男性）。
5. 火葬骨を鑑定する場合、非火葬骨の場合と同じように性別や年齢を推定し、形態的特徴を明らかにし、火葬される前の形態をできるかぎり復元するように努力している。同時に埋葬する際になんらかの選択がなされたのかどうかも検討するように努めている。例えば第二頸椎の問題がある。「のどぼとけ」と俗にいわれている部分がいつごろから意識され、選択され、埋納されるようになったかといった問題である。

筆者の調査によれば、山口県周東町の上久宗遺跡では第二頸椎の歯突起（火葬骨）が意識的に埋葬されたようである。第二頸椎の歯突起の選択的埋葬は平安時代（上久宗遺跡は10世紀）まで遡ることができるかもしれない。本例でも第二頸椎の歯突起が残存しており、貴重な例といえよう。

謝 辞

欄筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課の諸先生方に感謝致します。

《参考文献》

1. 松下孝幸, 他, 1980: 熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳（熊本県文化財調査報告46）付: 1-17.
2. 松下孝幸, 他, 1980: 熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺Ⅱ（熊本県文化財調査報告45）: 61-68.
3. 松下孝幸, 他, 1983: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告2）: 19-30.

4. 松下孝幸, 他, 1985: 長崎県松浦市倭階田遺跡出土の近世人骨。倭階田遺跡—松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書— (長崎県文化財調査報告書第 76 集): 191-196.
5. 松下孝幸, 他, 1992: 北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡 V 区 (奈良時代以降編) (北九州市埋蔵文化財調査報告書第 117 集): 416-441.
6. 松下孝幸, 他, 1994: 山口県豊北町大河浜遺跡出土の人骨。大河浜遺跡 (山口県埋蔵文化財調査報告書第 165 集): 11-21.
7. 松下孝幸, 1995: 北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡 (北九州市埋蔵文化財調査報告書第 172 集) 1502-542.
8. 松下孝幸, 1996: 北九州市普濟院跡出土の近世人骨。折尾横穴群内普濟院跡: 95-121.
9. 松下孝幸, 1996: 長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨。頭ヶ島白浜遺跡 (有川町文化財調査報告書第 1 集) 167-87.
10. 松下孝幸, 1997: 山口県豊浦町中ノ浜遺跡出土の近世人骨。(印刷中)
11. 中橋孝博, 1987: 福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌, 95: 89-106.
12. 佐伯和信, 他, 1991: 長崎県松浦市田原遺跡出土の近世人骨。田原遺跡 (竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書) (松浦市文化財調査報告書第 10 集): 37-49, 70-71.

図

版



奈良遺跡航空写真（北から調査前）

矢印：奈良遺跡

手前の学校：中哇遺跡

a SK1完掘後
(西から)



b SK1直上土器出土
状況(北から)



c SK2完掘後
(西から)



a ST1 検出状況
(南から)



b ST1 壺検出状況
(東から)



c ST1 墓標
(東から)



a SK3完掘後
(北から)

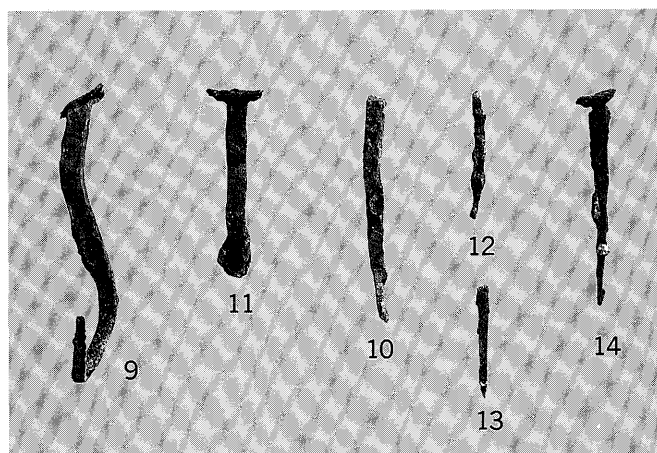
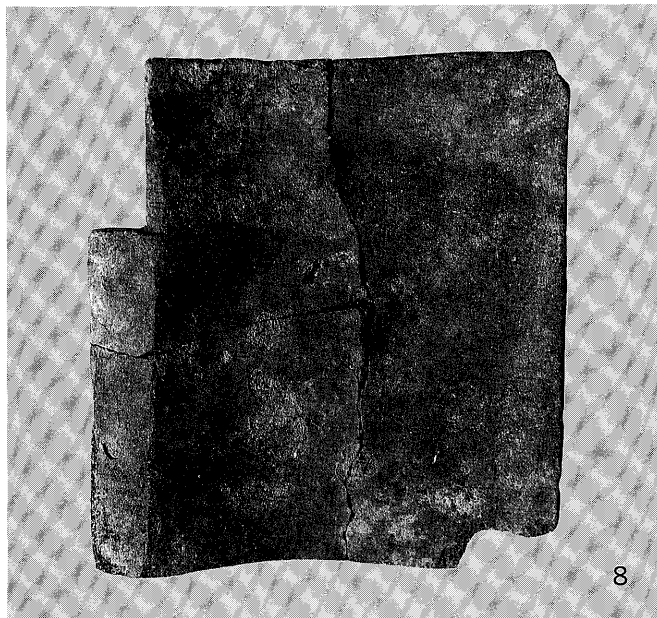
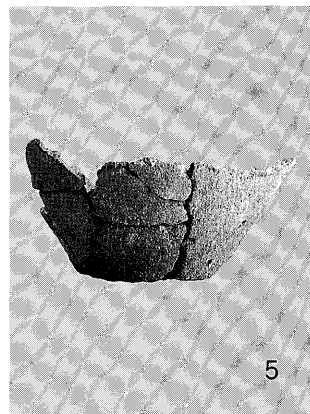
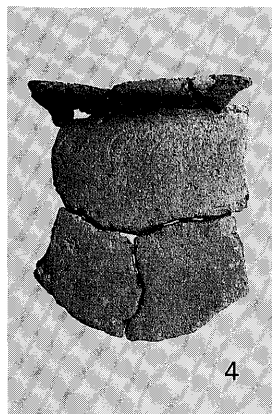
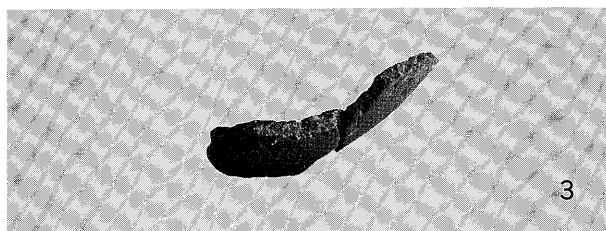


b SK4完掘後
(東から)



c SX1完掘後
(北から)





出土遺物

(財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第21集

広島市安佐南区高取北三丁目所在

巢取遺跡発掘調査報告

1997年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町一丁目1番5号